

のとの間プロジェクト～「のとの自習室」を中心に～

メンバー：豊嶋すみれ（医薬保健学域医学類 3年）
臼井大地（医薬保健学域医学類 1年）、岡田元（医薬保健学域医学類 2年）、橋本晃貴（医薬保健学域医学類 6年）、藤木くるみ（医薬保健学域保健学類検査技術科学専攻 3年）

担当教員：融合研究域融合科学系 准教授 川澄 厚志

プロジェクトの概要

珠洲市上戸町にある珠洲市産業センターをお借りし、土日に午前10時から午後4時まで自習室を開設。
10/11(土)よりプロジェクトを開始し、1/17(土)時点までに計20回自習室を開設。
小学生から高校生を対象に、学校の宿題や受験対策、定期試験対策などの学習支援を行う。

珠洲の子供たちに学習の機会を

【プロジェクトを立ち上げたきっかけ】
能登地域では、被災後空き家が増えている。また、子供たちの勉強場所不足が顕著であり、能登地域の地域的制約に加えて勉強場所が不足することは、子供たちの高校卒業後の選択肢を狭めてしまうことに繋がりがかねない。「のとの間」では、これらの空き家を活用し、ボランティアの宿泊拠点・イベントの開催場所・子供たちの勉強場所や遊び場とすることを構想している。その中でも今回は自習室に特化し、塾がほとんどない珠洲市で、学習支援の需要の有無や参加者の年齢層などを調べるために試行期間として実施した。

【実際の学習支援内容】
10/11(土)よりプロジェクトを開始し、1/17(土)までに計20回、のべ50名が自習室に参加した。
学習支援の内容は以下のとおりである。

- ・大学受験
- ・学校の定期試験
- ・学校の宿題
- ・英検、漢検



珠洲にこのような場所を
設けてもらえるのは
とてもありがたい。

(小学生保護者)



最近受験した人に
教えてもらえて助かる。

(高校生)

【課題と展望】

本プロジェクトに取り組む中で、被災して金沢市内への転校を余儀なくされた子供たちの中には、カリキュラムの違いによって本来受けるべき学習の機会を受けられなかった子供たちもいることが分かった。
また、珠洲地域の高校は被災前から定員割れの状況が続いていたが、被災後はさらに応募者数の減少が著しい。中学生の一部は高校受験のために勉強する理由を喪失しており、学習支援をより有効なものとするためには、背景にある問題にも取り組む必要がある。
これらを踏まえたうえで、今後は珠洲市をはじめとして能登地域に「のとの間」を複数設立し、子供たちへの支援を続けていきたい。

本プロジェクトの実施にあたってご協力いただきました能登里山里海未来創造センターの先生方、石川県立飯田高校の先生方、珠洲市役所職員の皆様に心より御礼申し上げます。

小中高生の学習支援、能登被災地「支援の隙間」でボランティア

会報記事

2026年1月9日 17:16(1月9日 18:07更新)

あとで読む

#全国 #全国 | 国際 | スポーツ #全国・海外



「石川・能登未来知図」の学習支援活動で、落合さん（右）に勉強を教える臼井大地さん（中央）と井上円さん（2025年12月、石川県珠洲市）

2024年元日の能登半島地震で被災した石川県珠洲市で、小中高生の学習支援をするボランティア団体がある。金沢大生が中心の「石川・能登未来知図」。支援の手が十分に届いていない地域で勉強の場を提供し、解けない問題は学生が教えている。代表の金沢大3年豊嶋すみれさん（22）は「支援のフェーズが変わってきている。その隙間に入りたい」と意気込む。

「複雑な問題やね。一回聞いてみよう

か」。昨年12月下旬、珠洲市の公共施設。金沢大1年の臼井大地さん（20）と井上円さん（20）が、高校3年の落合梢さん（18）と模試の復習をしていた。落合さんは「最近受験した人に教えてもらえてありがたい」と笑顔だ。

未来知図は地震から5日後に医学系学部の学生が中心になって設立し、現在は他学部や他大学も含め60人ほどが参加する。これまで100回以上、メンバーを現地に派遣。当初は倒壊したブロック塀の撤去や家財搬出が中心だった。

豊嶋さんは24年3月、輪島市門前町の祭りで初めて活動に加わった。クイズラリーを手伝い、「また能登を元気にしたい」と話す子どもたちの姿に心を打たれた。

次第にボランティアの要請が減り、支援のフェーズが変わってきたと感じるように。昨年10月から「子どもたちが集まれる場所をつくりたい」と週末に学習支援をしている。小中高生が自由に集まって勉強し、学生に教わることもできる。そんな中、豊嶋さんは落合さんの話に驚かされた。

被災し金沢市の高校に転校した落合さん。1年後に珠洲市の高校に戻ったが、カリキュラムにずれがあり、学んでいない単元があった。自分で勉強するしかない。豊嶋さんは「知られていない現実がある」と感じた。

取材した日に訪れたのは、小学生1人と落合さんを含む高校生2人の計3人のみ。団体の活動があまり認知されていないのが課題だ。豊嶋さんは「学校の先生は一生懸命支援しているが、手が回りきっていない。このままだと受験までのスタートラインすらずれてしまう。私たちがやらない」と語った。

新聞にも複数取り上げていただきました！
北海道新聞 1月9日（共同通信配信）